

フユシャクについて



▲イチモジフユナミシャク
上：メス 下：オス
(2013. 12. 28撮影：大宮自然公園)

冬の雑木林は生き物の気配が消えて夏に比べればとても静かになってしまいます。昆虫の多くは卵や蛹の形で寒さに耐えていますし、幼虫や成虫で越冬するのも落ち葉の下や木のうろの中でじっとしています。

しかし、その冬の時期にだけ成虫が現れてくる昆虫がいます。その代表がフユシャクと呼ばれる仲間です。冬にだけ親が出てくるシャクガの仲間の総称です。シャクガとは蛾のグループでも種の多い仲間ですが幼虫が細長い尺取り虫の形をした小型～中型の蛾です。その中のフユシャクは日本国内で40種近くの種類が知られています。常陸大宮市内でも10種程度が確認されました。

フユシャクの特徴として、冬の時期にだけ現れるということ以外に、オスは普通に羽を持ち飛ぶことができますが、メスは羽を欠くか縮小して飛ぶことができなくなっていることがあります。このように雌雄で大きく形状が異なることを「性的二型」といいます。

なぜ、冬にだけ現れるかといえば、天敵が少ないことが挙げられます。競争相手もいないので雑木林を独占できます。それでも、寒さに対しての備えを発達させなければなりません。

メスの羽がなくなったのも、体温を奪ってしまう恐れが強い羽を縮めるという進化を経てきたのではないかと考えられます。卵を持ったまま、寒い中を飛ぶことをやめたわけです。しかし、足は発達していて、幹のうえを歩き回ることができます。

オスはメスを探さねばならず、羽をなくすことがで



自然部会専門調査員 佐々木 泰弘 氏
(茨城県生物多様性センター 自然環境調査員)

きなかったのでしょうか。メスの出すフェロモンを頼りに飛び回りメスを見つけるわけです。

また、雌雄とも成虫の口部が退化し食物を一切とりません。何も食べずに1ヶ月近く生きることができます。冬には、花や樹液が無い理由もありますが、食物の水分が凍死につながるとも考えられています。

このようにとても変わった蛾の仲間ですが、フユシャクの仲間は普通種も多く、市内の雑木林でも多く見ることができます。ただし、夜行性の種が多く、昼は落ち葉の下や木々の間などに隠れていて、なかなか見つかりません。夜に雑木林に行くと、飛び交う姿を見ることができます。冬の夜空を飛ぶ虫の姿は何か異質なものを感じて素敵です。また、木の幹を注意深く観察すれば、交尾中のフユシャクを見ることができます。冬の森の中でも元気に活動している虫たちがいます。

特に常陸大宮市街地の西側にある大宮自然公園は下草刈りがよく行われており、観察しやすく、そしてフユシャクの種類も多く、良いポイントです。数年前から、同好の仲間とともに写真撮影などに訪れている場所です。

興味を持たれた方は見に行ってみてください。その際は必ず防寒対策を忘れずに、フユシャクの観察には徹底した防寒対策が必要です。昼に飛び回る種類もありますが、夜に出かけるときは、懐中電灯と安全面のため複数の人で出かけることをお勧めします。

そして、確認情報をぜひお知らせください。

※昆虫類の「はね」は、「翅」ですが常用漢字ではないため「羽」に置きかえています。

■問い合わせ■

文化スポーツ課

文化・スポーツグループ ☎52-1111 (内線344)